



「僕、忘れてないよ。」

タッチちゃんが二歳の時におばあちゃんが天国へ行きました。その時、おじいちゃんはとっても悲しかったのですが、タッチちゃんが歩いたり、おしゃべりしたりする姿が可愛くて、随分癒されたのだと、何度も何度もタッチちゃんに話してくれました。

元気になったおじいちゃんは、ご飯を食べる時も、お風呂に入る時も、お散歩や旅行に行くのにも、いつもタッチちゃんと一緒にしました。最近タッチちゃんは学校に行ったり、放課後にお友達と遊んだりするので、前ほど一緒にいられませんが、それでも二人は変わらない仲良しです。

おじいちゃんは、いろんなことをタッチちゃんに教えてくれます。タッチちゃんはそんなおじいちゃんが大好きです。でも、大好きなおじいちゃんが、最近元気がないような気がします。さて、何が起きているのでしょうか？



今日は、日曜日です。どうしたんでしょう？ パジ
ヤマ姿のお父さんが、おじいちゃんに向かって大きな
声で話をしています。

「だ・か・ら、お墓参りは来週の日曜日だって言っ
ただろ？ 昨日の夜、何度も確認したじゃないか。せ
っかくのお休みなんだから、ゆっくり寝かせてくれ
よ！」

朝から近所に響き渡るくらい大きな声でした。い
つもは優しいお父さんが、珍しくとっても怒っている
みたいです。隣の家のボチも、ビックリして家の中に
隠れてしまいました。



おじいちゃんは、黙ってしまいました。そして、シ
ョンボリして一人でお散歩に出かけていきました。そ
れを見ていたタッチちゃんは、なんだか胸がチクチクと
痛くなりました。

タッチちゃんはしばらく考え事をした後、何やら忙し
そうに工作を始めました。



タッチちゃんは、おじいちゃんがお墓参りの予定を忘れても困らないように、素敵な『手作りポスター』を作って、おじいちゃんのお部屋やトイレ、玄関などアチコチに貼り付けることにしました。

去年の夏休み、旅行を楽しみにしていたタッチちゃんに、おじいちゃんがやってくれたことを思い出したのです。



お散歩から帰ってきたおじいちゃんは、玄関に貼ってあるポスターに気づいてボソボソと独り言を言っています。

「なにになに？来週の日曜日はお墓参りか？8時に出発だね？お父さんが車を運転してくれるのか。助かるなあ。おやつを用意するんだな。よし、後でタツちゃん和買いに行くとするかな。」

そこへ得意気にタツちゃんが現れて、

「エヘン」

咳払いのマネをひとつしながらニッコリと笑いまして。おじいちゃんは

「タツちゃん、このポスター上手に書いたもんだなあ。一人で書いたのかい。大変だったね、ご苦労様。」
タツちゃんは、心の中で小さくガッツポーズをしました。



その日の夜、ご飯を食べ終わった後にタッチャンがテレビを見ていると、台所の方からお母さんの声が聞こえてきました。

「あら嫌だ、おじいちゃん。『ご飯まだ?』って、さっき一緒に食べてたじゃないですか?まだ足りないってことかしらあ?」

おじいちゃんに背中を向けたまま、いたずらっぽく言いました。

するとおじいちゃんがビクッとした顔で

「わしは食べ取らんよ?みんなはもう食べたのかね?」

と言いました。今度は、お母さんは水道の蛇口を止めました。振り返ったお母さんの顔は、笑っていません。

ちよ、ちよっとどういう意味ですか。いつだっておじいちゃんのご飯を一番によそっているんですよ。おじいちゃんに声もかけないで、先に食べてしまうなんてことはしないわ。・・・そうよ、するものですか。どうしてそんな風に・・・残念だわ。」

お母さんは、大きな目を真っ赤にして、涙を2粒こぼしました。



おじいちゃんは、またまたシヨンボリしてお部屋に戻っていききました。それを見ていたタツちゃんは、胸がズキンズキンと痛くなりました。

そしてしばらく考えた後、テーブルの上に置いてあるミカンが入ったカゴを持って、おじいちゃんのお部屋に行きました。



「おじいちゃん、この前ミカンの皮で作ってくれた
タコのお化けみたいな奴、どうやって作るのか僕にも
教えてくれる？」

おじいちゃんは、にっこり笑ってみかんの皮で火星
人を作ってくれました。タッチちゃんは、おじいちゃん
の作り方を見て覚えしました。それからタッチちゃんは図
工の時間に作った貯金箱を見せたり、お友達のタケシ
君とどうしてケンカしてしまったのか、お話をしたり
しました。

そうこうしているうちに、普段通りのお母さんの声
がしました。

「タッチちゃん、お風呂沸いているわよ。」

いつも通り、おじいちゃんとタッチちゃんは一緒にお
風呂に入ることになりました。



おじいちゃんはタッチちゃんの背中を洗いながら言いました。

「タッチちゃんは、ずいぶんしっかりしてきて、すっかりお兄さんになったねえ。それに比べておじいちゃんはダメだなあ。なんだか最近失敗ばかりで、ダメなおじいちゃんになっちゃったよ。」

今度はタッチちゃんがおじいちゃんの背中を洗いながら言いました。

「僕が何か失敗をしても、おじいちゃんは怒らないで助けてくれるじゃない。この前、学校で嫌なことがあった時は、僕の話最後まで聞いてくれたでしょ。ぼく、とってもうれしかったよ。あんまりうれしくて、宝物だったビー玉をおじいちゃんにあげるって言ったんだよね。でもおじいちゃんは受け取らないでこつ言っただけで覚えてる。」

エヘン、エヘン（本当の咳払い）

「今度は、タッチちゃんが困っている人に優しくしてあげなさい。」

タッチちゃんはおじいちゃんのしゃべり方をマネしました。

「ぼく忘れていないよ。」

タッチちゃんはちよつと胸を張って見せました。おじいちゃんは背中を小さく揺らして、鼻をかみました。



おじいちゃんは、今でも時々失敗をしますが、ションボリすることはありませんでした。実はおじいちゃん、今とっても忙しいのです。

先週、学校で近所のお年寄りから「昔遊び」を教わる授業があったのですが、その時のこま回し名人がおじいちゃんだったのです。みんなは、投げたコマをそのまま掌に乗せて回す「直接手乗せ」という技を教えてほしくて、タッチちゃんのお友達が毎日教わりに来るようになったからです。

良かったね、タッチちゃん